Rainbow

第 3 期 OB　森岡 耕作

◆青出於藍而勝於藍

放っておいても青くはならない藍という植物は，人の手を加えて染色過程を経ることによって，自らが元来発する色よりも鮮やかな青を放つ。中国戦国時代の思想家である荀子は，教育の重要さを説く際にこの藍の例えを採用した。すなわち，人間は際限のない欲望のみをもってこの世に生を受ける（青くはない藍）が，教育を介して学問を修めること（人の手による染色過程）によって，後天的な規範や秩序（鮮やかな青）を獲得することができる。

他方，この当意即妙な表現は，『荀子』における前後の文脈から転じて，藍を師匠，青をその弟子と置き換えることによって，弟子が師匠よりも優れることをも意味している。「出藍の誉れ」という慣用句がよく使われていることからもわかるように，「青出於藍而勝於藍」は一般的にはこちらの意味で理解されていることが多いであろう。師匠の教育によって，その弟子は師匠に勝るような成果をあげる。種々の学問の発展を考えてみると，このような意味もまた言い得て妙であろう。

◆青色でなくても

しかし，もう少しだけ考えを巡らせてみると，後者の意味で荀子の言葉を捉えてみた場合，1 つの異議を唱えたくなる。すなわち，弟子は師匠を超えるほど鮮やかな青色に輝かなければならないのか，と。藍と青の例えは，そもそも目指すべき方向性が予め定められているように感じられる。つまり，青色という単一のベクトル上に師匠も弟子も存在し，その長短によってのみ両者が評価される，という単純な世界が想定される。

確かに，師匠と同様の方向で，師匠よりも優れた成果をあげることは素晴らしいことかもしれないが，それを達成することができない弟子は，出藍の誉れを得ることのできない落第者なのであろうか。そうだとすると，同一ベクトル上における進歩が，その対象の限定性ゆえにより後期において困難になり，その結果，多くの落第者のレッテルを貼られる弟子の数が増えてしまうということになりかねない。しかし，それでは困る。いろいろ困る。

そこで，思考を転じて，青色志向から脱したい。物理的／化学的には不可能かもしれないが，藍から青色の補色である黄色が出てきてしまってもよいかもしれない。いや，黄色でなくとも，赤色や緑色，ありとあらゆる色ができてきもよいかもしれない。

◆Rainbow 小野ゼミ，大学院の場合

来年度，小野ゼミには，研究生も含めれば世界各国から 6 人（自分も含めていただけるならば 7 人）の大学院生が集まる。少し前まで，大学院に進学することは小野ゼミにあっても少し変わったことのように

思われる傾向があったかもしれない。しかし，今や，それは変わったことのように思われない。むしろ，多様な大学院生が所属する小野ゼミにあっては，その存在を身近なものとして捉えている学部生も多いことであろう。

まさに，小野ゼミの大学院には虹色を許容／育成する土壌がある。大学院の授業では，自由な多様な議論が展開される。それぞれが異なる専門領域を背景に，種々の意見が述べられる。青色の意見，赤色の反論，紫色の新たな見解（ただし，黄色の声援がないのは少し残念かもしれない…）。自分自身が全く評価することのできる立場にないこととは承知しつつも，このような土壌は，偏に小野先生の教育的志向によって整えられたものである。皆がそれぞれの色で一番を目指しつつ切磋琢磨している（そう，2 番ではダメなのである）。ときに，議論し，時に協力しながら。そして，その成果が大学院生だけでなく学部生との間でも共有されながら，今も，次の色が生み出されつつある。

ドバイで学会発表を行う著者

◆Rainbow 小野ゼミ，ある実務家の場合

さて，大学院の発展というテーマならば，上段で筆を置くべきであったかもしれないが，「Rainbow」という抽象的なテーマを設けてしまった以上，小野ゼミと実務家のことにも触れなければならないであろう（いや，是非とも触れたい内容でもある！）。ただし，実務家といっても，今回はある 1 人の女性にスポット･ライトを当てたい。その女性とは，私の同期（3 期）の杉山（旧姓：小出）摩美さん，その人である。

一昨年，株式会社博報堂に転職した彼女は，その年に日本広告業協会（JAAA）が主催する第 38 回懸賞論文に応募し，見事に金賞（第 1 位）を受賞した。統一テーマ「これからの広告に求められること」について，「e ライフ時代の広告コミュニケーションとは」という副題を設定した彼女の論文は，広告業界において想定される従来型の消費者像ではなく，新たに現れつつある消費者（生まれたときに既に，発展した ICT の恩恵を受けることができた消費者）を深く分析した上で，消費者の価値観に対する考察を軸に，これからの広告コミュニケーションへ提言するものである。同論文で展開される分析／考察は，学術論文としても高く評価されるものであると思われる。

ちなみに，彼女は，JAAA 懸賞論文始まって以来の「初の」女性金賞受賞者であるだけでなく，博報堂としても「初の」金賞受賞者でもある。それゆえ，博報堂の社内紙においても引っ張りだこであったようで，その後の社内における活躍が容易に想像できる（し，実際そうである）。

今回は大学院と 1 人の同期にのみ焦点を合わせたが，先輩方，同輩，そして後輩が学術界／実務界においてそれぞれの色で燦々と輝いている。それを思うとき，小野ゼミという畑で育てていただいたことに感謝し，誇りを感じるとともに，ふと，虹色を発色される藍に畏れ入ってしまう。